

安中市学習の森歴史博物館平成25年度企画展

富原文庫本会津若松城下絵図屏風展 新島八重のふるさと 会津の心

関連イベント 講演会 富原文庫本会津若松絵図屏風調査報告

2013年6月2日 3時半—5時半 安中市学習の森

0 富原文庫 平成10年東京に設立 群馬県安中市に移設して4年

史料学 絵画史料 屏風・古絵図・古地図・錦絵・兵法書・絵葉書 募
集・整理・解明 現在の収蔵数は約15万点

全国の城郭研究者・文化財行政機関に対応

展示会としては

上田商工会議所主催 池波正太郎真田太平記館開館記念

真田太平記の舞台 戦国時代の城と合戦絵図展

上野動乱 絵図に見る戦国城館展

初公開長野県の城絵図展 伊那の古城絵図・陸軍省築造局明治5年
城郭存廃絵図

1 本展示会の目的と構成について

目的 東北大震災の復興 帰宅難民・復興支援ライフラインの確保・食
品関連の工場再建 今何ができるか 東北を元気にしたい 所蔵資料の

公開 展示会開催場所について、検討したのですが、新島八重ゆかりの
安中で開催させていただく意義が大きいと考え、ご相談のさせていただ
いた。

当初 新島八重ゆかりの会津を初公開資料で見る

会津若松城下絵図屏風

会津若松城、市街図による会津の変遷

和歌山、釜山、甲府、仙台等 しかし、展示会場は安中

検討の結果

新出資料会津若松城下絵図屏風で壊滅する前の会津風景

会津の国家的活躍 蝦夷警備 品川台場 房総半島 京都守護職

大義のない無用な内戦を繰り広げた薩長、優柔不断な徳川慶喜

鳥羽伏見の戦い 会津戦争 斗南藩移住 荒廃した会津を明治35年

実測図という生の資料で現実を直視

会津の復興 城跡の設計図 鳥瞰図 市街図 天守模型

屏風の報告・会津若松城・安中城調査報告・会津の砲術・井上貫流文

書・幕末明治錦絵・明治35年土性図と初期会津地形図の経緯・鳥瞰図

の世界

3 会津若松城下絵図屏風について

発見の経緯、2012年昨年6月オークションで落札、所蔵先不明。会津から出たもの。同時に道中図屏風6尺6曲半双屏風―大坂から浜松までの城を描く。

屏風の形式 1曲・1扇・1隻・1双・高さ 今回は3尺6曲1双屏風
94cmx540cm、1扇巾45cm、

屏風の名称 記載はない 描画内容と類似屏風の名称に統一すること
ということでから会津若松城下絵図屏風としましたが、実際は城下のみならず、
周辺村々まで描かれています。

作成年代 辛亥 嘉永4年1851年新島八重6歳 会津戊辰戦争が1868年
ですから、さかのぼる事17年、破壊される前の城と城下町

作者 皎斎清光図之画 朱印「皎斎」「清光之印」

本名 大須賀清光 文化5年1808年―1875年明治8年6月17日67
歳没 43歳の作

人物 会津人物事典画人編坂井正喜、会津城下の商家に生まれ、絵師に
転向、佐藤香斎、遠藤香村、島貫盤月に師事、歴史画を得意とし、
江戸城登城風景図屏風国立歴史民俗博物館所蔵8曲1隻屏風1847年
8月諸藩の江戸と城と見学する庶民を克明に描いている、大野原追鳥狩
図屏風は会津藩の軍事を描いた安政6年1859年の6曲1隻屏風、蛤御

門合戦図等藩政にかかわる絵図を多く残している。

屏風の記載内容と記載領域の検討 500近い文字情報

会津若松城内が五層天守、御三階櫓、11基の2層櫓、多聞櫓、聖堂、日新館、御薬園、割場に2層の鐘突き堂、城下に藩施設として、北学館、南学館、古川御屋敷、黒川御代官所、御用屋敷2か所、角場2か所、人參御役所、会所、御煙硝蔵2か所、御米蔵8か所、御酒蔵、御塩蔵、御本陣2か所、御番所、御厩、瀬戸場2か所等32か所が描画される。武家屋敷は藩士名が103軒表示されている。山本八重の生誕地、米代四之丁も西出丸近くに屋敷が描かれるが、人名は記入されない。町村等は約200か所。街道は会津5街道と言われる日光山街道（下野街道ともいわれ、会津本郷から栃木へ、此の街道は会津防衛から考えると、幕府の援軍が入る道となる。今市まで128km、今の会津西街道）二本松街道（猪苗代湖の北。猪苗代城から中山峠を超える。越後街道、戊辰戦争の際は中山峠を通らず、北へ迂回して母成峠から猪苗代を經由して本街道に入り、滝沢本陣から甲賀口郭門、北出丸大手口へ進軍した。二本松まで60km）北米沢街道（会津から北へ米沢まで56km）、猪苗代街道（白河街道ともいわれ、滝沢峠から猪苗代湖の南を通り、白河へ69km、江戸まで260km）、越後街道（会津から西北、神指城跡の北を抜け、越後新発田

まで津川を経由して92km)、領界までの距離表示は米沢領界、新発田領界、長沼領界、宇都宮領界までの表示。寺社は約120か所近くあり、別に宗派、石高を表示し、絵図中に寺社内の観音、天神、地藏、薬師、愛宕、稲荷、不動、文殊、弘法、荒神、天満、金比羅、白山、熊野、住吉、弁天、神明、墓、庵室等の記入がある。名所旧跡は温泉、瀧、桜がある外、蒲生、小笠原、芦名等の墓を表示。寺社明細が記入されている。

西からみた会津若松城下及び周辺を描く、右隻に南、左隻に北を描いている。右隻に羽黒山、瀧之温泉、温泉道(東山温泉方向)、小田山(戊辰戦争の際は四斤山砲直径8,6cm、4kgの弾丸)、湯川と小田橋、天神橋、中央に城内、郭内、左隻に飯盛山、さざえ堂、滝沢峠、湊川、大塚山、磐梯山、最後に松窪村、下柳原村で仕舞している。

次に、描画領域を確定するために、500近くに及ぶ、文字情報の抽出を行い、福島県立博物館本との記載内容の比較検討を行いました。(福博本は視野が高いため、湯川と東側が見えている、富原本は視野が低いため湯川が隠れている、視野が低いことによる表現が忠実である。表現地域はほぼ同じであるが、上部では福博本のエリアが広く、湯本村迄描かれ、中部では福博本に石風以南が描かれていない。南部では滝沢村の描写に富原本では発展した状況が描かれる。

右隻1扇福博本以後に御米蔵2か所が設置

右隻3扇福博本では小田橋に新橋、下野街道湯川に大橋、湯川に烏橋
等の橋名記入

左隻6扇福博本は下居合村で仕舞、松窪村は未記入

福博本に以下の記載はない。○寺社明細 ○想町家数四千百四軒 ○
町々木戸貳拾八ヶ所 ○自船番所五拾七ヶ所 ○町在寺五百六拾六ヶ
寺

会津若松城下屏風記入人名検証作業『要略会津藩諸士系譜』による
屏風は姓のみしか記入されていない。福博本と比較したときに、藩士屋
敷の移動が認められる。

木村・兵庫 御小姓御軍事奉行添役 500石 辰野

小池・検断 記名なし

井深・梶之助550石 内記重休550石御側学校奉行 柴

萱野・権兵衛1000石 同 記名なし

安部井・登450石 岩之助武和 御家老附外様士 木本

永井・左京400石 番頭組々頭 原

原・隼太360石 外次郎利高 御家老附外様士 小原

西郷・勇左衛門500石 若年寄 700石 萱野

野村・左兵衛400石 左馬之丞 御家老附壺番組 550石 **白井**

伊奈・(伊南)範陸400石 伊南内蔵丞芳広 御家老組々頭 **記入なし**

笠原・諸士系譜に記載されない。 **佐久**

佐久・伝左衛門方義 新番組 5人扶持 **笠原**

103名の記載があり、12名の屋敷移動が見られ、検断といわれる半官半民の町年寄15名のうち14名が明記されている、藩士はおおよそ300石以上の名前が記入されている。山本家は当時、砲術師範として、父山本権八の石高は200石で名前が記されていない。

会津若松城下絵図屏風 大須賀清光 これまで二点ある。

旧会州一蔵品館本 無落款 八重の桜展で江戸博、展示品

6尺6曲一隻屏風、154x361cm 年代未記入 屋敷人名55名

弘化元年1844年—2年作と推定されている。

福島県立博物館本。高瀬家旧蔵 6尺8曲一隻 135x484cm 年代未記入 屋敷人名143名 本屏風は会州本より後とされているので、製作年代は1843—1850年となる。

記載されているすべての文字情報を明治43年の2,5万分壺地形図に落としたところ、絵図は会津城下町を中心に、東西4km、南北6,5kmを描いていることが判明しました。

3 会津若松城跡

藤崎定久大正7年1918年生まれ 昭和46年日本の古城、大塚薬報に古城めぐりとして、連載されたものをまとめたもの。会津若松城は1963年昭和38年2月3日に掲載された。

天正18年1590年秀吉が会津に入り、蒲生氏郷35歳に42万石、さらに92万石を与え、文禄元年1592年夏から2年5月まで地名を若松とし、城を鶴ヶ城として、伊達、徳川の抑えとした。城は湯川の扇状地に構築され、台地の先端に本丸、東に2の丸、3の丸と弱点である、東に3重の防備を行い、加藤明成の時代に堅固な北、西の出丸が構築され、白河街道の付け替えとともに、大手が東から北へ変更され、北出丸東口が大手となった。大手の防衛は正面の出丸、側面の本丸、背面の二の丸隠し郭の3方から行われ、戊辰戦争に於いても新政府軍はついにここを突破できなかった。南方が弱点となるが、当時は牛沼があり、堀の役割を果たしていた。会津城は寛永16年1639年、天草の乱の後構築され、当時の大砲に対応し、全面、改築された。

慶長3年1598年氏郷の死により、秀吉は上杉景勝120万石を与え、伊達、徳川の抑えとし、秀吉死後、小田山からの弱点を克服するため、西へ4km のところに神指城を構築、家康に対応したが関ヶ原の敗戦によ

り未完に終わった。

慶長5年1600年関ヶ原後、家康の娘婿蒲生秀行を60万石で再度会津に移封。上杉の冴えとしたが、蒲生家は断絶した。慶長16年1611年大地震、天守に被害、

加藤嘉明40万石、白河街道付け替え、鶴ヶ城大手変更、

加藤明成、天守改築、北出丸、西出丸造成

加藤家の滅亡により 寛永12年1643年保科正之(2代秀忠の4男3代家光弟)23万石、預領5万石共28万石、会津松平家藩祖として入府。9世226年幕末まで存続した。文化5年1808年蝦夷、樺太警備 文化7年1810年浦賀警備、8年1811年三浦鎌倉3万石替地、10年1813年ロシアとの和議により、浦賀警備は浦賀奉行に、弘化4年1847年2月江戸湾房総沿岸警備、富津。竹岡陣営、1397名、大砲70門、小銃400丁、新造船19隻、嘉永6年1853年品川第2台場警備、安政2年幕府は蝦夷地を松前藩から公取、5藩に分割、さらに安政6年1859年庄内、会津を加えた。土別、斜里、紋別が会津領に、戸切地陣屋構築。文久2年1862年会津守護職拝命、畿内の治安維持、非常時の軍事指揮権を持ち、大坂城代等を統括した。慶応3年1867年12月孝明天皇崩御、慶応4年1868年8月会津戦争、9月22日開城。明治2年1869年斗南藩3万石

設立移住。翌年17000人余移住。城は明治7年1874年4月取り壊し、862円で売却された。昭和40年天守再建して今になる。

会津盆地は東西13km、南北34km。城下町は南東に位置し、標高210－230m、東西3km、南北2, 5km。郭内は東西1, 8km。南北1, 2km。武家屋敷は400軒余り、郭内は3－7mの土塁と16－17mの水堀に囲まれ。16の郭門が設置、3か所は不明門。半鐘で割場からの火事を知らせた。大手は甲賀口門から北の出丸東門、郭外にも2400軒の屋敷、200前後の寺院。町方16000人居住、城内の規模は明治に毀された3の丸を含めて、東西760m、南北500m、ちなみに、神指城は東西560m、南北650mでした。

城は広大といえず、外郭も16もの城門があり、防衛上兵力が分散するが、会津松平家譜に伝える、保科正之の1国1城の小城は堅固成るを以て主とし、天下の府城は万民の便利安居を以て第一とす、これは江戸城を述べたものですが、会津城についても、江戸城の支城として、武田信玄の人は城、人は石垣、人は堀という考え方で、北部防衛戦線の拠点であって、北を仮想敵国と考えており、会津松平はここで戦うことを考えていない。戊辰戦争時の幕府の裏切りや南からの来襲は想定されていなかった。

4 会津の心 兵法・砲術・築城

兵法

江戸時代の兵法は実戦がなくなり、戦争技術の継承のため、学問として体系化された。儒学の影響により、武士道、士道等倫理的側面が強くなり、陣法、戦法の研究は下火になった。寛永12年1643年保科正之は始め河陽伝(戦国末期に発生した楠流の系統、心性を悟り、諸民を敬愛するを上、計謀によって学ぶを中、戦術をむさぼりなろうを下。正心修身、治国平天下の大義、を基本とし、賊徒を討伐するための智謀、戦術の妙を教えるもの。)山神流、太子流 明暦3年1657年甲州流 河陽伝に戻り、元禄1688年に甲州流、再び、河陽伝、天明8年1788年長沼流、幕末に洋学、蘭学とともに近代兵法が伝来し、会津藩も安政末頃1859年蘭式歩兵、慶応年1865年仏式軍法により、軍制改革を行い、部隊を朱雀、青竜、玄武、白虎に編成。

長沼流兵法 山鹿流と人気を二分し、門弟1000人を数えた。長沼外記 澹斎始祖 甲州流軍学者、戦国時代の戦史研究、孫子等武経七書を学び、明の陣法、操練に、西洋火術を取り入れた。ちなみに現存日本最古の兵法書は平安時代末期にの闘戦経といわれますが、伝えたのは鎌倉

時代源3代の兵法師範大江家で、戦国期の実力主義の前、中国兵書孫子の兵は詭道なり、調略というだましあいとした思想が日本の国風に合わない、知略ばかりに頼れば、春秋戦国時代のように国を危うくする。兵としての精神、理念も学ぶ必要がある。金剛山麓に居を構え、楠正成もいた。源家古法と伝え、兵としての思想、精神、理念、心法を説く。長沼流も3分は書、2分は口伝、5分は自得にあり、兵要録22巻の練兵で兵談、鍊銃、山神流築城法、出師で陣法、戦格で孫子講習

山神流兵法 武芸流派大事典 山神政光流祖 山本勘介と親し

い 芦名盛隆に招かれ軍師 4代の向井吉重から保科家に入る

会津藩教育孝に、方5尺高さ1尺の箱に砂を盛、水を注ぎ、大小円形方形数10種の金へらで、土塁、堀、櫓のかたちを作る。要は地形を考え、歩足の状況、攻守の法を会得する。その法は方、円、曲、直、鋭の五法より、平城、平山城、山城の三法にして、極秘大星金鳥という免許が授かる。次に、城郭の縄張のできたものは本位に進み、境目繋ぎの法を印可、これを得れば本位に進み、六花練兵奥秘の伝を許す。その法は古陣図解、軍要宝鑑抄等なりとしている。

砲術、軽筒(薄鉄で銃身を作り、皮で包み、題は桐で馬上筒)の稲留流、永田流、短筒の種子島流、長筒、槍筒、仕掛筒、廻筒の夢想流、自由斎

流、狼煙の荻野流、一味流、棒火矢、乱火(鉄弾に焼薬を入れ導火をつけ発射)、狼煙の新格流、諸葛流、棒火矢の石橋流、智徹流、子母砲の堅昆流、6尺の長筒の北條流、高島流 14流派

角場は日新館に5区、師範の宅地内、鉛は現品支給、火薬は分規金にて各流派調達、小筒の目標は15間(30m)、大筒は弾により15－20丁(1600－2200m)を目標とした。大砲の試射は猪苗代湖の湖上でも行われた。追鳥狩は会津藩最大の軍事訓練であった。

品川台場第2台場防衛

嘉永6年1853年6月アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー浦賀来航、7月23日12基の品川台場構築命令、8月21日1－3台場工事着手、安政元年1854年5月3日1－3台場完成。1月11日ペリー再来航、安政2年1855年10月2日安政大地震、死者は7000人から1万人、第2台場は会津藩が警備、13名の守備兵が即死。

台場は江戸湾の奥、隅田川河口に構築され、巾は御殿山下から第3台場まで3kmにわたり、6個の台場が完成した。安政元年1854年3月3日条約が締結され、4, 7以下の台場の工事は中止となった。

江戸湾沿岸の12ポンドカノン砲の射程2500m に守備できるように、沿岸から2km、浅水深に設置された。砲台前方4－5km は水深4－5

m、大型戦艦が艦載砲の射程距離まで侵入できない位置にある。ボート砲のような小型船舶積載砲に十字砲火。生麦事件の際、英国のホートが第1台場の側間を通り、品川湾の測量をしている。この簿^へとは5門の大砲が乗せられるとしている。射程は24ポンド、12ポンドカノン砲で800m、機能は正面迎打ち、左右から横打ち、背面の野砲で追い打ち、ペリー艦隊のサスケハナは喫水6、2m、9インチ榴弾砲の最大射程3100m、最も低いサラトガで5mでいずれも台場を標的に出来ない。第2台場は品川台場正面中央の最大の台場であった。正面、左右正面、左右側面と背面の6面からなり、34000m²、18の大砲砲座を備えている。

井上貫流文書 武衛流第4世砲術師範 武衛流は天草の乱の際、松平伊豆守大筒威力を認め、それを伝承したもの。2002年「幕府鉄砲方与力井上貫流武州西台徳丸が原文化9年1812年砲術記録」高島秋帆さかのぼる29年前の記録、2006年3月日本銃砲史学会で報告、銃砲史研究352号掲載、2006年江戸東京博物館「幕臣井上貫流左衛門家文書の世界」編纂井上貫流3代の日記251点江戸博、砲術書富原文庫は215点の大砲絵図、砲術書、起請文からなる。此の時、全

文書の目録作成、2007年平成19年板橋区立郷土資料館「江戸の砲術―砲術書から見たその歴史展」開催に際し、展示資料の貸し出しによる井上貫流文書の初公開とシンポジウムで和流砲術の基調講演を行いました。内容は江戸の砲術展図録、銃砲史学会357号に記載されています。

井上貫流は元文元年1736年9月忍藩で生まれ、文化9年1812年12月徳丸が原調練の4か月後73歳で死去、武衛流4世、威遠館演銃場主人、文化5年1808年正月幕府鉄砲方井上左太夫の推挙で幕府鉄砲方与力に推挙、同年蝦夷地警備高島陣屋禦防卒長、蝦夷警備の記録を多く残している、展示の「文化5年辰年持場割」は蝦夷地の防衛全体の記録で、仙台、南部、会津、津軽4藩4100人の持場を記録している。会津藩についても、樺太700人、宗谷、斜里、利尻600人、松前、白神崎300人、砲術方森重靱負や御鉄砲方西尾謙次郎の名がみえる、井上貫流は石狩湾高島陣屋で津軽藩を担当、多くの記録を残している。安政6年1859年9月幕府は会津藩等4藩に東蝦夷を与え、警備を命ずるとあるが文化5年の記録は初見ではないか。

日本銃砲史学会、国立歴史民俗資料館宇田川先生が会長をされていて、今、雄山閣から日本銃砲史を出版されようとしている。コラムに

井上貫流を紹介するようという依頼で井上貫流の概要と新たに1771年に伝来した西洋の独輪車銃という技法を紹介した、これと同じものがダビンチの手稿に記載されている、実は砲架らしきものを手に入れて、調査していたら、昭和43年尾芸術新潮にダビンチのおもちゃの兵器というコラムに射程装置の付いた大砲として紹介され、イタリアで1区に18万円で作られ、日本に2組しか入っていない。入手した檀家では大砲が失われ、何かわからない状態でしたが、台座にダビンチと記されていました。これを大部のダビンチの学術書に検索しようとして、独輪車銃を見つけた。10連、12連、井上貫流のものは2重列の5連、4連ですから。一歩進んでいるといえます。

大砲の比較

投下器 文永11年1274年蒙古襲来てつはう、震天雷 火薬と鉄片を詰めた陶器製の破裂弾

仏郎機 室町末期輸入された青銅製大砲・石火矢

和砲 前装滑空砲球弾、大型火縄銃 手に持てるのを抱えの大筒、1貫筒を和製大砲。

木砲 使い捨て 持ち運び、製造容易、安価

臼砲 モルチール砲

前装滑腔砲、球形炸裂弾、高角射撃、口径大きく、砲身短い。

高い弾道で土塁や城壁の向こうを焼き玉で破壊炎上させた。携臼砲

ハンドモルチールは20センチ口径で野戦銃砲として2－4人で担架で

担ぎ移動させた。官軍が鶴ヶ城攻略に使用。29ドイムで最大射程270

0m、20ドイムで1500m、

榴弾砲 ホイッスル砲

炸裂弾をうちだし、目標上空で炸裂。曲射撃、台車で移動、カノンより

砲身短い、最大射程1800m

ボートホイッスル砲

前装滑腔式青銅砲。敵前上陸するときには手漕ぎボートの船首の供えら

れた小型砲、最大射程は12ポンド砲で992m、上陸後も陸上砲として

使用された。

加濃砲 カノン砲

前装滑腔式野戦砲 守城砲、要塞砲、鉄球平射砲。移動させることが

ない拠点防衛の巨大砲、品川台場や弁天台場、天保山台場は沈没し

ない海上要塞と位置付けられた。最大射程2800mの 24 斤(ポンド)砲

等が供えられた。

四斤山砲

前装旋条砲突弾、野砲は330kg射程4000m、山砲は銃身100kg、砲架。車輪で総重量218kg、有効射程400－600m、最大射程2800m、1859年フランスで開発された前装ライフル式青銅製洋式野戦砲 幕末明治の主力砲 4kg(仏製の斤は1kg、英製の斤はポンド640g)の長弾使用 ナポレオン砲(12斤カノン砲)と呼ばれることもあった。戊辰戦争では軽量で分解可能、機動性に優れた山砲が使用された。弾道は野砲と臼砲の間、放物線を描いた。

ガトリング砲

6銃身機関銃、ハンドルを回すだけで薬莢の取り出しと次弾装填ができ、1分160発－200発の連射、黒色火薬で銃身が詰まるという欠点、日本に3門、2門長岡藩、1門官軍戦艦甲鉄戦艦に装備 1門6000両

アームストロング砲

鋼鉄製、後装旋条砲、戊辰戦争で使われた6ポンド野戦砲は口径6, 4cm、全重量250kg、最大射程3600m。162kg、命中精度高く、当時最新鋭世界最強とうたわれた大砲。佐賀藩が輸入し、国産化した。薩英戦争で射程 2800m の 24 ポンドカノン沿岸砲を装備、英国の艦載砲は射程

4000—5000m のアームストロング砲であった。砲撃後、砲身を下げる必要がなく、砲の仰角や位置を固定したまま、照準を狂わすことなく、連続発射が可能、会津戦争では4km 離れた小田山から天守を砲撃。戦艦開陽や甲鉄戦艦に装備、

パロットライフル砲

前装旋条銃、戊辰戦争では3インチ野戦砲、砲身403kg、最大射程2700m。松代藩が小田山から鶴ヶ城を砲撃。命中精度高く、下関砲撃では米艦田一キャンがポンド砲を積載。

小銃

旋条銃の開発は軍制改革をもたらせた。散兵による遠距離からの狙撃射撃へ 弓槍が無用に 武士が不要に 城も不要になった。1860年旋条銃によって新たに歩兵・騎兵・銃兵の3兵を創設、廃藩置県後兵部省が回収した小銃は181012丁といわれる。

性能比較等は須川氏、保谷氏、日本銃砲史学会、幕末軍事史研究会、軍事史学会等のデータによる

火縄銃

火縄式前装滑腔銃球弾 最大射程500m、有効射程100m 1分に2—3発、2000—3000発の耐久性、火種必要、天文12年1543年伝来。

ゲペール銃

高島秋帆が初めに輸入、徳丸が原で約100丁使用。。火種不要。当初火打石式(燧石式すいせき)強い風で火花が飛ばされ使えなかった・有効射程100m、強いばねで命中精度が悪い。尖った火打石が手に入らない。

1845年以降雷管式前装滑腔銃球弾 雷管は起爆薬を容器に詰めたもの。命中精度低いが、射程100ー 300m 最大射程950m。銃剣を装備できる。1丁5両、旋条銃の時代となった西洋から旧式銃として大量に輸入された。火縄銃が改造され、また、文久元年湯島銃砲製作所幕府鉄砲方江川氏1万丁ゲペール生産を2000丁旋条銃に変更。慶応元年1丁5両。4年1ー2両と値崩れ。

人間命中精度 35m47%、75m31%、150m14% 命中率91 m74, 5%、182m41, 5%、273m16%、365m4, 5%

ヤーゲル銃

会津藩装備、雷管式前装旋条銃球弾、尖弾 命中精度良くなる。

鉛 玉を銃口から入れ、槊杖(カルカ)で打突して変形させライフルに圧着させる、威力があり、狙撃銃となったが、装填時間がかかった。

到達距離、威力、正確性 弾丸の製造可能から。幕末横浜長崎函館から

数10万丁の旋条銃輸入される

ミニエ銃

雷管式前装(ライフル)銃拡張式突弾 1840年フランスで開発 装填
時間ヤーゲルの5分の2 人間命中精度 450m47% 射程1000m
命中率91m94, 5%、182m80%、273m55%、

中心線から外れる距離発射後300m、保谷教授の実験では

ゲペール銃4, 3m ヤーゲル銃90cm ミニエ銃26cm

慶応元年長州が薩摩名義でグラバー商会から購入した小銃、

ゲペール銃1丁5両3000丁、ミニエー銃1丁18両4300丁、

新政府軍総督が軍務官に要求した弾丸、ミニエー銃50万発、

スナイドル銃2, 5万発、スペンサー銃2, 5万発

ミニエー銃は江戸城占領後、後装銃に改良され、元込めミニエー銃と

された。(スナイドル銃)火薬、雷管、弾丸が一体となったカートリッジ

が採用され、連続射撃が可能になった。ミニエー銃でも官軍は元込め銃

、奥羽は前装銃であった。

慶応元年18両、4年9両に値崩れ。

エンフィールド銃

前装雷管旋条銃突弾 薩長大量購入、幕府や会津も使用。南北戦争終

戦とともに日本に53021丁と大量輸入された。慶応元年40両、慶応3年以降12－17両に値下がり。

スナイドル銃

後装旋条銃カートリッジ式弾丸 新政府軍採用 慶応2年36両、慶応4年26両、三田藩350丁を藩士に買わせる。

スペンサー銃

1860年アメリカで開発された世界最初の連発銃。南北戦争では 94196丁が北軍に納入された。後装式旋条式7連発銃突弾 銃尾弾倉方式 射程700－820m 薩摩藩16015丁、佐賀藩2000丁購入。慶応2年元卸価格28両。 後装銃の弾丸はカートリッジ式であり、輸入と供給ルートが必要であった。戊辰戦争は前装旋条銃主力の戦いであった。

バウムガルデン銃

慶応3年1867年4月会津の山本覚馬はドイツ人レーマンと4300丁の契約をし、300丁を受け取ったが弾薬供給の目途が立たず、使用できなかった。和歌山藩も明治2年4000丁輸入、後装旋条銃。

戊辰戦争

慶応4年1868年3月京より帰った会津は軍制改革に踏み切り、正規兵2800名、砲兵、農民兵、町民兵を加えた7000名で新政府に対抗した。

錦絵 史料学画像資料として注目されています。当文庫では幕末歴史絵の中で城郭錦絵、合戦錦絵、風景版画として、鳥瞰図、道中図、市街地図版画を収集。歌川豊国の2大弟子、国貞と国芳の弟子たちの作品 芳虎、芳艶、貞秀が多い。鳥羽伏見の戦いも多く残されているが、5枚続きの山崎合戦官軍大勝利之図もその代表例である。城中大火の図は歌川芳藤が描く、大坂城炎上を描く、貴重な絵図である。 会津戦争も明治になって多くの絵柄が残されたが、薩長政府を憚って、芦名の会津敗走に託した風刺絵として残されたり、官軍勝利として戊辰絵巻等に描かれている。容保が京都防衛のため、西国街道に構築した梶原台場・樟葉台場が発見されたのも最近のことである。

斗南藩設置

明治2年11月生まれたばかりの容大(かたはる)に家名存続、南部3万石か猪苗代3万石か、会津藩士、5000名は帰農、4000戸のうち2800戸17000名が南部へ、陸路は16泊17日で三戸へ到着、斗南藩設立。明治7年には1万人が会津へ帰った。

陸奥出羽国郡行程全図 橋本玉蘭斎 空飛ぶ絵師 全国の絵地図錦絵鳥瞰図 浮世絵師としては五雲亭貞秀 横浜絵等都市鳥瞰錦絵で有名 1807年—1878年 歌川国貞の弟子 会津も斗南も描かれる。

南部藩海際絵図 6尺6曲1双屏風 南部国絵図と同一地域を描き、海際絵図である。これは元禄国絵図提出後、元禄 14 年 7 月日本図編成の準備段階に幕府が調達した絵図であるが、本図は伊能図と比較したとき、より地形が現状に近く、台場等の書き込があることから、元禄海際絵図をもとに幕末に測量した物と思われる。

6 荒廃した原風景

明治35年農商務省北会津郡土性図 1902年1万分一地質図

地理調査所100年史や明治37年の地理調査所事業報告によれば、最初の近代的地図の伊能実測図に続く、日本政府の近代的地質調査機関として、明治11年5月3日内務省地理局地質課が設置、明治13年3月5日1880年内務省勸農局地質課に移管、全国の地質図、土性図の整備計画、ところが日本には地質、土性調査のベースとなる地図がないため、地図整備から始めた。高さは気圧計、位置は天文測量、地形は平版測量(導線法)、5万分一原図、土性図用10万分一地形図、地質図用20万、40万分一地形図を作成し、明治15年2月13日農商務省直轄の地質調査所と設立された。明治21年伊能図以来最初の実測日本全図、16

0万分一日本帝国全図を陸地測量部に先んじて作成した。

地質局、農商務省外局地質調査所、鉱山局地質課、明治31年地質調査所に復帰。土性調査は耕地、廃地の調査目的、産物の土質、開墾の成否、牧場の現況、農事全般、標本採取、土地の高低、

明治18年以降、毎年刊行、明治37年には37地域完成。

土性調査の責任者、恒藤規隆は福島県の依頼による北会津の特別土性調査を行い、明治32年地形測量、34年土性調査を実施、35年に1万分一土性図、説明書を作成した。土性調査は農業の基礎として重視、各県からの依頼も多かった。明治38年4月農業試験場へ移管された。

特徴

- 1 一覧図から南北8面東西4面＋1面で2面空白での31面と推定される。展示は南北方向で南側3列、10面を除き、北側21面を軸装している。西半分に会津盆地、東側に背あぶり高原と猪苗代湖を描く。
- 2 近代測量による最初の会津地域の本格的な実測図である。陸軍には各地方部隊による迅速地図があり、会津については明治23年6月測量の新発田の歩兵第15旅団司令部による2万分巻迅速測図があるが、非常に精度が悪く、地形図といえるものではない。陸地測量部の正式2万分巻地形図は会津地方がなく、陸地測量部の会津は明治43年の2, 5万

分巻が嚆矢となる。今回の屏風記載文字検証作業も2, 5万を利用した。

迅速図を作成した歩兵第15旅団司令部は 日露戦争の際、満州軍第1軍第2師団第15旅団として歩兵16連隊と歩兵30連隊が編成された。旅団は師団より小さく、連隊と同等か大きい。

3 会津若松城三の丸が日露戦争後の軍拡により明治41年歩兵第65

連隊、大正14年歩兵第29連隊、昭和12年再度歩兵第65連隊、2

9連隊は昭和6年満州へ、各地転戦し、昭和17年ガダルカナルで

玉砕、練兵場ができる前の三の丸が描かれる直前の貴重な記録

4 1万分の一という大縮尺で、城は堅固な要塞を残し、郭内はほとんど

壊滅、外郭の堀の一部を残す、城下町はほぼ残されているという戊

辰戦争後の状態をよく伝えている。

5 神指城跡 慶長5年1600年5月10日12万人を動員して2ノ丸工事を

行い、6月1日には本丸二の丸の土塁と石垣、水堀と門が完成、10

日工事中止。家康との臨戦態勢に入る。関ヶ原の終結により、未完

に終わったが、旧事雑考では本丸、東西75m、南北130m、塁の巾

18m、鷹さ10m、東西北に城門、四方を石垣、17mの堀、二の丸

は東西200m、南北220m、塁の巾27m、高さ7, 5m、四方に門、1

5mの堀とされ、現在、部分的な土塁しか残存しない神指城跡が本

図では本丸、二の丸とも土塁が明瞭に残存し、堀跡も見て取れる。
図面上その規模は二の丸は東西580m、南北650m近くに及び。
阿賀野川に面した状況がよく描かれている。ただ、工事は中止されて
おり、全容は未定であるが、石田明夫氏によると築城に際し、移
転させられた村は13か村、南北5km、東西1,5kmに及ぶ広大な
ものであり、完成時の規模が大きいものであることが想定される。

7 力強い会津の復興

会津城研究 加藤長四郎 相田泰三の紹介

弘化4年1847年生まれ 藩の御用商人、49歳まで商人、大正12年19
23年死去、郷土史研究資料募集に東奔西走した。

石垣刻印 甲賀口門に蒲生氏郷家臣、猪蒲生源左衛門の刻印

西出丸中央門石に水没した場所に刻印があると伝えている

明治28年 戊辰若松城下明細全図 内題明細図

明治36年 会津鶴ヶ城明細図

明治38年 御本丸明細全図内題会津鶴ヶ城御本丸之図

明治41年 岩代会津新撰若松市全図 木版

明治44年 蒲生若松城下明細図

大正9年 加藤保科両家旧城図

昭和49年長四郎孫晃氏によって、市全図を除き、2度にわたり復刻

市街地図の変遷に見る会津

大日本職業別明細図福島県昭和4年12月若松市等商店記入袋付

会津市史で復刻されているのは大正15年6月12日版、本図は大正6年

木谷佐一が東京交通社を起こし、1877－1931年 昭和13年木谷佐一

の死後、西村善汎が昭和17年まで716号迄定期刊行 全国的には地図

出版社柏書房により復刻されている。元柏書房社長東京古地図倶楽部

の芳賀啓さんによると昭和30年代まで2000－3000種類刊行されてい

るとのことです。表裏、写真広告入りで全国の商工業の実情を知ることが

出来る優れものです。広告写真豊富で当時の商工業の実情が詳細にわ

かる基本図

若松城址平面図 1000分1 戦前 74x87cm

三の丸が南部を除いて残存せず、明治35年から昭和15年の間

若松市街全図(番地入)4800分1 小林印刷所 昭和14年以前

番地入り若松市街全図 昭和15年11月 小林印刷所

会津若松市街地図各種 明治32年・明治41年上記・明治44年
明治45年・大正3年・大正6年・大正9年・昭和2年・昭和3年・昭和8年・昭和9年・昭和11年・昭和12年・昭和15年上記以外・昭和16年・昭和24年・戦後・刊年不祥図あり 年代別21図

若松公園設計図 本多静六 埼玉県菖蒲町生涯学習文化センターに
本多静六記念室 慶応2年1866年生まれ、明治35年の日比谷公園
を皮切りに35年にわたり全国の著名な公園ほとんどの設計に携わり、
日本の公園の父といわれた。昭和27年85歳で死去。

大正6年若松公園設計方針を作成。すでに3の丸は対象外、歴史的遺構
、石垣上松杉の老木保存、春夏秋冬郭ごとの景観植栽を検討。今位置の桜名所の基礎ができた。

版画 会津鶴ヶ城築城600年記念 塩見栄一 桜花鶴ヶ城・磐梯山新雪
リトグラフ1984年昭和59年 限定150部 芦名直盛から600年

模型 会津若松城天守模型 昭和40年再建

鳥瞰図 鳥山志摩六 会津・郡山 福島県の作家 福島県立博物館所蔵

鳥瞰図目録では青木志満六となっている。藤本一美さんに確認してい

ただいたところ、象形文字で書かれていて、青木は間違いとのこと

した。吉田初三郎 大正広重といわれ昭和30年亡くなるまで全国の鳥

瞰図を書いた・その弟子達、金子常光等の会津若松は存在しない、ただ

、初三郎の猪苗代町の鳥瞰図原画は今開催中の東北歴史博物館「美

しき東北の町並 鳥のまなざし吉田初三郎の世界」展に出展されてい

ます。猪苗代城を中心に背景に磐梯山が描かれた45x120cm八戸ク

リニック町角ミュージアム所蔵とされ、印刷図も展示されているよう

です。ただ、初三郎は昭和30年に亡くなっており、このころの作品は2代目

吉田朝太郎とのこと